

特別寄稿

歌学か がくと

政治

哲学者・評論家

鶴見つるみ俊輔しゅんすけ

日本は、中国のとなりにいるので、使っている言語について、それほど古いとも思っていない。だが、ヨーロッパに比べると、そこで使われている言語より、ずっと古い言語をもっている。

イギリスの言葉は、『ベーオウルフ』やチョーサーの作品から今日までつづいている。フランスの言語も、『ローランの歌』のかた、ひとつの言語と文学の歴史をつくっている。

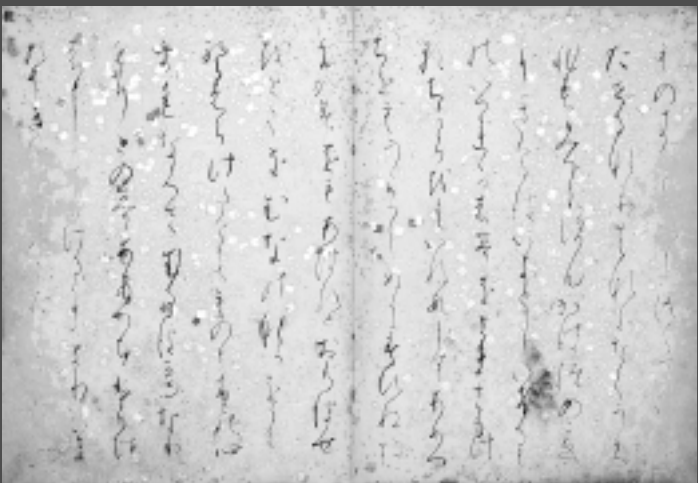
それらにくらべると、『万葉集』と『風土記』は、もっと古くから今日までつづいている文学のものである。両方とも、今日の日本人が、きいてわかり、読んでわかる。

ヨーロッパの文学史では、イギリスとフランスにはながいひとつづきの発展があるが、それ以外のところでは、英語とフランス語ほどのつづきかたをしていない。

私は、このころ、イラク戦争でアメリカにつくようにという大臣の演説をテレ

ビでうつけていて、「ここには、『万葉集』以来の歌心うたこころがないと感じる。みんな大学を出ているので、法の解釈をふくめて、大学でならった法学、社会科学がここでの答弁を裏打ちする。だが、それは、明治の近代国家成立以来の、学校制度による裏打ちであって、二十年来の日本の歌心に裏打ちされたものではない。欧米の十六世紀以来の社会学科の学習にもとづく科学であって、歌学ではない。そのことが、イラク戦争でのアメリカ合衆国の先制攻撃を支持する決断と、それにもとづく日本の法律整備の説明によくあらわれている。日本の不戦憲法とアメリカの戦争追隨に矛盾がないという説明など、ここは、さすがが大学出身だなあと感じさせる。だがここには、生きとし生けるものの叫びを自分の心に感じることをもつとした歌学はない。

これとして殺すのかという答えは、科学の学習にもとづくものであって、歌心が



元永本古今集より（東京国立博物館蔵）

古今和歌集

（仮名序）

「古今集仮名序」における貫之の歌論
やまと歌は、人の心を種として、万の
言の葉とぞ成れりける。世中に在る人
事、業、繁きものなれば、心に思ふ事
を、見るもの、聞くものに付けて、言ひ
出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の
声を聞けば、生きとし生けるもの、いづ
れか、歌を詠まざりける。力をも入れず
して、天地を動かし、目に見えぬ鬼神を
も哀れと思はせ、男女の仲をも和らげ、
猛き武人の心をも慰むるは、歌なり。

（以下略）

（岩波書店『新日本古典文学大系』より）

ら発してはいない。

明治国家がつけられる前の、明治国家をつくった人びとには、歌心があり、そこから、国をつくる方向があった。高杉晋作・坂本竜馬、もつとさかのぼって吉田松陰、この人びとの政治思想は、今の国会での大臣の政策説明とはちがったものである。

殺されたくない。殺したくない。この言葉は紀貫之が千年以上前の『古今集』の序文で述べた歌学に通じる。その歌学を、大学で学習した借りものの法学、社会科学を心の中におさめることをとおして、現代の日本の政治は、日本の伝統から離れた。

明治以前のながく戦争のなかつた日本の時代から離れ、その時代を欧米の近現代とくらべておくれたものと見ることになれてきた。しかし、明治以前は、おくれたものだろうか。

アメリカ合衆国は、近代日本とおなじく新しい大国である。この国をみずからアメリカと呼ぶのは、言いまちがいであり、米国人が自分たちだけをアメリカ人と呼ぶとき、中米、南米、カナダ人から自分たちもアメリカ人なのという不満がきこえる。現在の米国にヨーロッパの移民がきて「アメリカ」を名のつたとき、すでにそこには先住民がいて、その人たちは現在の日本人とおなじアジアから旅してここについた。彼らは、私たちがよく似た身体・習慣と歌心をもっている。彼らののこす話には、「今日は死ぬのによい日」というような、自分の死を見つめる境地をつたったものがある。しかし、今の米国民には、この先住民の文化をうけつぐ姿勢は見られない。私たちは、千数百年をこえる日本語の連続性で、この日本語にもつづく歌心に自信をもっている。